〔駐村研究員だより〕

ゆとりの乳搾り

——困苦乗り越え先端酪農
を成し遂げた鈴木洋一牧場——

河合松夫

1．楽しむ酪農

花いっぱいの広場

広々とした十勝平野を北に走る国道241号線を行くと，鮮やかな花と牛の顔を描いた大きな看板が見える。これが宇都宮賞受賞，北海道士幌町鈴木牧場への道しるべである。

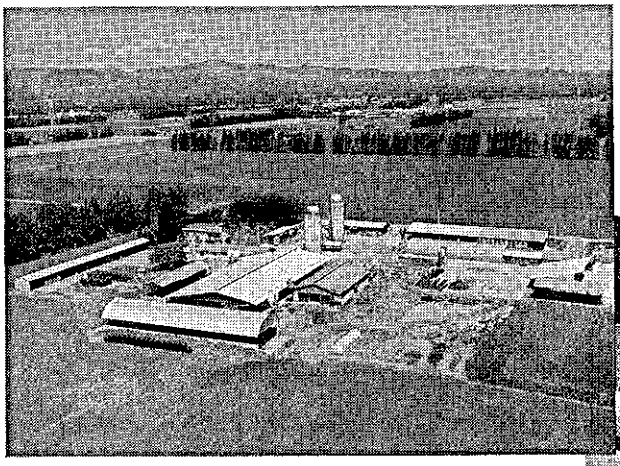
緑のからまつ並木に囲まれた牧場入り口を進むと，そこには赤，黄，白色とりどりに咲き盛るマリーゴールド，ベゴニヤ，きんぎょ草などの花壇が続き，ゴミひとつないアスファルトの大きな広場に出て，片側には間口70メートルの長い農舎にトラクター，車両が並び，向かいに斬新なミルキングパーラーと畜舎群，2基の大型サイロなどが整然と配置され，背後は広々とした圃場である。

「口からそのまま飲む牛乳を生産する酪農は，飲む人たちに衛生面での保証を与える責任がある。牧場にきれいなところをつくれば汚いところが目につき，みんなが牧場全体をきれいにしていこうという気になり，商品生産者としての自覚を日常管理の中で培っていくと共に，美しい牧場は牧場を営む家族全ての心のよりどころとなる。」施設の隅々まで清潔と美化が行き届いた牧場管理の信条を，牧場の主鈴木洋一はこう語る。

訪れる見学者たち

鈴木牧場には年間を通し，団体・個人の見学者が絶え間なく訪れる。大阪の安全食品を育てる会が毎年定期的に来るのをはじめ，生産者，主婦，小学生，大学生，ジャーナリスト，研究者や外国からの来訪者もある。30年来，常に最先端の技術を開発，実践し，貧しい一介の農家からついに欧米酪農に比肩できる水準に到達した鈴木牧場は，見る人ごとにそれぞれの興味と関心をそそる。

空港からバスで来た関西の消費者グループの一行は，広々とした環境と整頓された施設の規模に驚き，清潔な管理に満足し，畜舎の中を一巡，成牛の自動給飼システムや自動搾乳施設に感心し，最近設備したロボット哺乳装置で，初生牛が自ら個室に入り満腹して出ていくのを興味深く眺め，子牛を撫でながら初めてみる牛乳が出来るまでの過程に納得し，



鈴木農場の全体鳥瞰。約3.5haあり，320頭飼育しているが400頭まで可能。（平成11年）

大阪の消費者グループ「安全食品を育てる会」が毎年見学に来る。（平成11年）

飼料が有機栽培，無農薬，低農薬であるとの説明に聞き入る。320頭の牛を家族，実習生合わせて4人だけで管理し，毎日4トン（200g紙パック2万個分）生産していること，そして休暇も十分に楽しんでいること，作業衣の玲子夫人がそう説明すると感嘆のどよめきが起こった。

鈴木牧場は30年間一貫して省力化，システム化に挑戦してきた。「人間は誰もが1日24時間を平等に貰っています。だが300頭の牛を余裕で管理できるものもいれば，100頭の牛でさえようやっと管理している者もいます。それだけの差があるわけです。どう時間を使うのかという訓練ができていないのです。いろいろな角度から自分で判断し，経営を行う。だから，経営が大変だから休みがとれない，経営が苦しいから給料をやれないという感覚では，いい経営はできません。自分でやれる範囲は本当に知れているのです。周りが協力してやってくれるような労働環境を考えながら，僕はやってきました。……これからの農家は考え方を変えないといつまでたっても魅力ある職場にならない。3K（キツイ・キタナイ・キケン）酪農じゃあ，後継者も育たないし，嫁さんも来ませんよ。それには自分たちが楽で，楽しくやっていくことが大切。生活に余裕をつくることが秘訣なんです。」鈴木の講演の一節である。

その言葉どおり住宅の前の広場をいち早くアスファルトで舗装し，テニスコートにして家族で楽しみ，2人の息子は小学校4年頃から朝も6時には牛舎を手伝う後継者の正道は高校卒業後，釧路，浜中町の牧場で1年，アメリカウイスコンシン州で6カ月の実習を了えて，今では経営の主力となるかたわら，ゴルフを楽しみ，パソコンに熱中し，またスポーツ万能という好青年，帯広畜産大学出身の二男信行は，農協乳業会社のサラリーマンながら酪農家指導を担当し初志を貫いている。町議会議員を始め酪農，環境関係など公職で時間を割かれることの多い鈴木は，ときおり夫人と共に十勝管内他町村のパークゴルフ場巡りで息を抜く。いかに忙しくても全員が週休を必ず取り，ずっと以前から家族みんなが月給制にしている。全国初といわれるコンピューターをはじめ各種先端技術を導入したのは数十年かけてゆとりを創出するための挑戦であった。酪農をはじめた当初から鈴木は楽しむ酪農を心がけていた。

夫婦でハワイ7日間の旅

1998年2月，鈴木夫婦は連れだってハワイ旅行に出かけた。玲子夫人はカラウアイ島の広い砂浜でゆっくり遊んできたことを思い出す。夫婦は毎年国内や海外旅行を欠かしたことがない。今から31年前，2人が結婚したとき，赤貧の時代ではあったが，5年経ったら毎年2人で旅行をしようと約束し合い，毎月5,000円ずつ積み立てを始めた。夜も寝ないで働く苦闘努力が実り，約束通り夫婦は，時に子供たちも加え，毎年家族旅行を続けている。海外には1991年，結婚25年を記念しバンコク・香港の旅，翌年シンガポールと続け，ハワイで3度目になる。1カ月5,000円で始めた旅行積み立てはその後1万円，2万円と増やし，近年は5万円ずつにしたが，未だに下すことなく積み放しにしており，それを何に使うか2人は楽しみにしている。

2．牛乳缶運びの中学生時代

小作争議に立ち上がった父

鈴木牧場の入り口に空高く伸びたトド松，桜，ポプラ，の古木が目につく。トド松は周りが190センチメートルほどもあり，幹にはキツツキが巣穴をいくつも穿っている。サルノコシカケ茸が生えている。町内でも数少ない名木である。昔ここにあった田辺農場事務所の名残をとどめているのだ。鈴木洋一の父辰治が田辺農場の小作人としてこの農場事務所後へ分家したのは1936年，辰治24歳の時であった。水田跡の荒廃地でひどい湿地のや

せ畑であったが，退役軍人で頑固一徹の農場主は小作人の私生活の隅々までも厳しく規制し，1反歩40斤（大豆24キログラム）の小作料は，無収穫に近い凶作年でも減免せず，不足分は全て借用証書にするという過酷さであった。1941年の凶作でいよいよ窮乏し，耐えかねた小作人は悲壮な決意で団結し，辰治が先頭になり，当時豊頃にいた地主に談判に及んだ。逮捕も覚悟の上で頑張った結果，さすがの地主も初めて譲歩し，一同ようやく危機を脱がれたのであった。戦争が苛烈となり，収束を迎え，敗戦に終わったのが1945年，それから農場は解散され，小作人は全て自分の土地を持つことが出来た。鈴木家はそれまで15町歩で5,360円の地代を払っていた。

父辰治は1912年，現在の音更町武儀にあった中田宮五郎農場小作農家に生まれ，その父は宮城県の出身で大工職もかねていた。尋常小学校を卒業した辰治は，当村士幌上居辺の堀田寅吉家へ農業見習い奉公に入り，通算9年にわたり未開墾地原野の新墾耕し作業をはじめとし，農作業の辛酸をつぶさに体験した後，実家から馬1頭，麦1俵を貰って当地へ分家した。この一連の体験が負けん気の性格に筋金を入れ，鈴木家の家風を作り上げた。

戦時下辰治は，当時革新的農村青年指導者で，その後の士幌村発展の起爆的存在とされた若き獣医師秋間勇と交流を深くしその指導を受け，また革命的政治家中野正剛に私叔したこともあった。後年農民運動の先頭に立ち血気に燃えた気概はこれらの影響によるものである。

働いた洋一少年

戦時中壮年期にあった父鈴木辰治は，積極的な発言や行動力が周囲から認められ馬事督励員を務め，戦後農業協同組合が発足すると第1期理事に選ばれ引き続き22年間在任し，そのほか多くの公職歴を重ねた。社会的活動が多くなる一方で自家の農作業は君子夫人が日雇を使いながらも家族中で守り続けなければならなかった。1942年生まれの洋一をはじめ姉妹弟たちは幼少の頃から一所懸命家事を手伝った。

有畜複合農業を志す辰治は1950年貸付牛1頭を導入し，豚，鶏と共に経営の多角化を図り，家族労働は更に重くなった。洋一少年は毎日牛を牧場に繋ぎ搾乳し，冬交通が途絶えると牛乳を駅まで運ぶのが日課になった。飼養頭数も5，6頭になっていた士幌中学時代には，登校途中23キログラム入り牛乳缶2本を運搬用自転車荷台両側に振り分け，5キロの道を士幌駅へ運ぶのが日課だった。帰りは空き缶に哺乳用脱脂乳を入れて帰った。農繁期には通学を休み家業を手伝うこともしばしばで，背丈こそ小柄であったが筋骨たくましい体力が鍛えられていった。

3．驚きに満ちたアメリカ実習

太田組合長の一喝で渡米

自らの進路を酪農と決めていた鈴木洋一は，中学校から酪農学園野幌機農高校へ進み，帰郷すると家業に専念した。現実の農業は理想とは程遠く，過酷な労働に関わらず負債がかさむ経営の中で前途に疑念をもちはじめていた。そうした時士幌農協太田寛一組合長から「若いもんが何やっているんだ。少し勉強してこい！！」とハッパをかけられたのである。父が農協役員で格別に親交が厚く，また組合長の長女が洋一とは中学同級生であった関係から両家は早くから家族ぐるみで行ったり来たりの親密なつきあいをし，太田組合長は見所のある若者と目をかけていた。

「鈴木君，アメリカの酪農を見て，何かつかんでこい」とある日突然論された。余りの唐突さに唖然としていると，「おまえの家の経営は破綻しかけているが，君が帰ってくるまでの間，破産しそうになったらオレが金を出して潰れないように支えてやる。心配せず

に行って来い。」とまでいわれ，他農協からも資金カンパして貰い，十勝からの初めての酪農派遣実習生として，追い立てられるようにしてアメリカ行きが決まった。実は前年カナダ，アメリカなど種雄牛導入のため視察した十勝地区農協連角田参事の斡旋によるもので，太田組合長はこれに鈴木洋一を推薦したのである。江別の町村敬貴牧場が紹介して，アメリカ，イリノイ州シャンブリック・ファームへ行くことに決まった。当時日本ではまだ一般の人々の渡米は少なく，手続きが厳重で200ドル以上は持ち出すことが出来ず，太田組合長の手配で知事の証明により札幌医大の健康診断書を添えるという段取りであった。酪農実習生は1年以上牧場で実習を終えたものが派遣される条件であったが，太田組合長の奔走によって僅か1日，町村牧場で実習しただけで許された。

1963年4月，士幌駅を出発するときは町内酪農関係有志，酪農家，同志青年がホームを埋めバンザイの声に送られ，さながら嘗ての出征兵士歓送のような勢いであった。飛行機でハワイ，ロスアンゼルス経由でシカゴ，オヘア空港へ到着した。

カルチャーショック

空港へは農場主の母親が迎えに来ていて驚いた。62歳になるそのお母さんの運転する車は2時間の道のりを農場へ疾走し，初めて見るアメリカ大陸の雄大さが心を打った。

農場は土地が130ヘクタール，牛乳130頭，すでに搾乳にミルカーを使い，パイプラインで，牛乳保存は日本では牛乳缶であったがアメリカではバルククーラー（牛乳冷却装置）が設備されていた。堆肥はバーンクリーナー（牛ふん自動排出装置）があり，牧草はベーラーで縛るなどすべての作業がシステム化されており，働き手3人で牛舎はきれいに管理され，当時十勝の酪農が多くて10頭程度を手搾りしていたのに較べ雲泥の差であった。

労働者だけの別棟の宿舎があり，水洗トイレで掃除は町から来る別の人がやり，食事は3食毎日異なったメニュー，土曜日は昼から休み，日曜日は家族と教会へ行った後，ピクニックで持ち寄った物を食べたり外食をし，自家用4人乗り軽飛行機でウイスコンシン州ミルウォキー市へ買い物やアイスクリームを食べに出掛けることもある。鈴木は「これが本当の“家族酪農”だ」とカルチャーショックを受けた。

シャンブリック農場は優良牛のいるアメリカでも最高の水準の牧場で，勿論高等登録牛ばかりであった。牧場マネージャーのクヌーツンは，米国内の有名牧場のマネージャーを歴任，乳牛審査員もしている第1人者であったのが幸運であった。在米中，進んだ機械化や合理的な飼養システムは貴重な勉強になったが，一番学んだものはクヌーツンの物の考え方であった。彼は当時55歳，酪農一筋でやってきて独身。洋一はジョージという愛称を貰い，彼の身の回りの世話一切をし，仕事だけでなく日常生活に密着しその合理主義を肌で学ぶことができた。

農場へ入って何よりもまず言葉に馴れなければならなかった。渡米に先立って上士幌の

20歳の時実習したアメリカ，イリノイ州シャンブリック牧場にて。中央が鈴木，右がオーナー，左がマネージャー。（昭和38年）

キリスト教会に半年通ってアメリカ人宣教師から指導を受けたが，現地入りして，なんとかひと通りの会話や読み書きできるまで毎日仕事を終えてから夢中になって勉強した。必要な単語を辞書から書き抜いては，農場主夫人に教えてもらって発音練習をした。毎晩深夜までの独習がたたって過労になり，日中の作業中に卒倒し，10日程度入院したこともあったが，日数を重ねるにともない現地生活に馴れ周囲から親しまれながら，得難い体験を重ねることができた。

有り金はたいて牛を土産に

1年間実習の予定であったのを延長して1年8カ月の滞在とし，みっちり勉強した。優秀な基礎牛を3頭ぐらいほしいと思って父に手紙を書いた。父が農協に相談したらしく，折り返し太田組合長から「うぬぼれるのもいい加減にせい！！」と大目玉の手紙が来てガックリ。洋一は酒もたばこも飲まない。極端に倹約して金をため，帰りにはヨーロッパでも回って帰ろうかと思っていた金で1頭だけ何とかならないかとクヌーツンに相談した。幾らあるというから有り金3,000ドル（108万円）をさらけ出すと「よし。おまえの夢を叶えるためだ。なんとかしよう」と，エクセレント（最優秀級）の初妊牛を1頭世話して貰い，輸送費の35万円は父が都合して帰国前に発送することが出来た。

手持ちの金を全部牛代に使い果たしたので帰国旅費は全く無くなった。たまたまカナダからサンフランシスコへ馬を輸送するという人があり，その車に助手として便乗，1週間を2人交代でぶっ通し運転し，サンフランシスコに着いてからはその運転手の世話で船の中のアルバイト稼ぎで帰国の途に就いた。甲板に積んだ牛・馬・豚などの輸送管理人という形で運賃はタダ。12日間で神戸に着き，その家畜輸送業者に帯広までの切符を買って貰ってやっと家へたどり着いたとき懐中僅か千円札1枚であった。

4．若い酪農経営者

経営を譲られる

12月に帰国し，直後から，出国の際カンパを受けた農協を連日「アメリカ酪農見たまま」と題し，講演して回った。翌1965年1月早々に，安村専務から「経営を息子にやらせたらどうだ」といわれ，父も「じゃあ，そうしましょう」ということになった。太田組合長は洋一に「これから10年間は，今までのように講演をしたり，公職に就くことは一切禁止だ」と厳しく言い渡した。翌日親子は太田助農産課長が仲に入り経営移譲の協定を結んだ。両親にそれぞれ給料を支払い，弟には家を建てるとき200万円やれと協定書に書かれ，後は自由にやれということでスタートした。父はたくさんの公職を持って社会的に広く活動していたが，22歳の洋一の方は500万円という多額の負債を背負い，破産寸前とも言える経営を一身に引き受けたのである。アメリカで買った牛1頭，父が飼っていた優秀牛を入れて搾乳牛5頭，育成牛5頭，耕地15ヘクタールであった。

アメリカで見てきたゆとりある酪農経営をやりたい，はっきりとその大志を抱きながらも当面とてもすぐに何かをやれる状態ではない。計画的な経営をする手始めとして1週間札幌に泊まり込みで農協中央会主催の簿記研修を受け，記帳，分析，経営設計の基礎を身につけた。どんな苦労も苦労とせず，独身で夢と闘志に燃えた青年は，目標実現のため頑張り，1日3回搾乳し，ある時は3日も寝ないで働いていたこともあったという。

反対を乗り越え結婚にゴールイン

アメリカ帰りで，開放的で活気のある洋一青年は，若い者とのつきあいも良く人気があった。良く出入りした農協事務所では女子職員のグループと親しくなり，一緒にお茶を飲み，アメリカの話をしたり，ダンスを教え，たまの休みには連れだって鈴木家の農作業手伝いに来ることもあった。帯広柏葉高校を出

て農協店舗に勤めていた仲島玲子は，その人たちの組には入っていなかったが，洋一少年が渡米直後に太田組合長に出した手紙を職場回覧で見て以来関心を持っており，帰国後いつしか両人は親しく語り合い共鳴するものを覚え，愛を誓い合うまでになった。玲子の実家はお寺で農業とは縁がなく，一方鈴木家は人も知る負債農家で，その上玲子は少女時代から体が弱く，両親はその体で農家へ嫁いで健康を損なったらどうなるかと反対の意向が強かった。当然鈴木家でも農業が未経験の彼女に対する心配があり，その成り行きは世間の話題にもなった。太田寛一組合長は，2人の決意の固いことを確認すると，かねてから交友の深かった仲島家，鈴木家を説得し，結局めでたく縁談は成立したのである。

明るくよく働いた花嫁

結婚当時の鈴木家は畑作と酪農の複合経営であり，いも掘り，豆刈り，デントコーン蒔きなど手作業が多く，牛舎や牧草の作業とあわせると労働時間が畑作だけの農家から見て長く過重であったが，新嫁の玲子は全く初めての農作業にむしろ興味津々で馴染み，苦にすることなく，毎朝5時には起き，牧草収穫の時期などは真夜中の12時，1時までかかることもあったが健康でよく働き，冷やかし半分で見ていた旧同僚に馬鹿にされてなるものかとの張りもあって，明るくおおらかな天性で笑い声を絶やすことなく，鈴木家をこれまで以上に楽しい団らんにしていった。

5．苦難を超えて多頭に

土地改良と構造改善

鈴木牧場周辺一帯は，湿性火山灰土壌のため生産性が低く冷害を受けやすいという悪条件に悩まされてきた。たまたま経営を引き継いでから2年目の1976年にこの地区に第1次農業構造改善事業が実施されることになり，当時の所有地22ヘクタール全面に暗きょ排水工事を行ったところ，これが良く効いて土地がぐんと良くなり，根菜類も普通に良くとれるようになった。同時に近隣と図って瑞穂トラクター利用組合を設立してトラクター，マニュアスプレッダー（堆肥撒布機）などを購入した。それまでの堆肥撒布作業はすべて手作業の重労働であったが，これで大幅に省力化が出来て念願の多頭飼育に一歩近づいた感じがした。見てきたアメリカとは土地条件も資本力も違うが，それに追いつけるという希望が芽生えた。

アメリカ直輸入牛で躍進

渡米実習から帰るとき思い切って有り金全部をはたいて買った雌牛が，その後の鈴木牧場の運命を開くきっかけを作った。最初に生まれた雄牛が70万円で売れたのである。住宅が100万円で建った時代だから思いがけない大金だ。このほか父がすでに持っていた優良牛の系統からもかなりいい牛が出て，次第に牛づくりの自信がでてきて，酪農畑作複合経営から，酪農専業への体勢を着々と進め，1970年には畑作を一切やめて酪農専業に転換した。

優良牛の導入，生産が経営発展のポイントであるとの確信の上に，鈴木は1973年から，78年までたびたび渡米して現地購買し，自らの牧場に19頭の牛を輸入した。1978年には総合施設資金を利用して一挙に10頭の優良牛の輸入を図ったが，総額3,000万円という投資は前例がないということで難色を示され，何度も信用農協連合会などに足を運んで説明し，やっと認められたのであった。これとは別に，輸入牛の成果もあがり農協から輸入委任を受けて士幌の酪農仲間のために渡米して48頭を買い入れたのも1978年であった。鈴木の渡米は10回を数える。

拡張を目指す経営はしばしば危機に直面した。総合施設事業資金導入に保証人のなり手がなく，やむなく太田組合長宅に懇願に訪れたが断られ，必死になって毎晩嘆願を繰り返したところ根負けしてついに太田氏個人の保

証で融資された。また，組合員貸付限度枠超過で，挫折寸前に追い込まれたとき，安村専務が私財を担保に提供され窮地を脱したこともあった。

知事賞と部屋を埋めるトロフィー

不屈の根性で家業に打ち込むかたわら，青年団幹部として活躍した鈴木洋一は1961年第1回北海道優良勤労青少年知事表彰の栄誉を受けた。意欲的な活動が高く評価されたのである。

1965年経営者となってからはしばらく公職などから遠ざかり，家業振興に精励し，特にブリーダー（種牡牛繁殖者）として次第に成果を挙げ，全道にその名を知られるまでになり1頭100万円，200万円という種牛や牝牛を出して，牛乳販売額よりも個体販売収入が大きく上回るようになり，1979年1月当時，鈴木牧場基礎牛40頭の記録は，体格審査点平均82.5点であった。内85点以上の優れた牛は9頭を数え，最高得点は91点をマークしており，通常が79点くらいという所から見れば資質の高さを知ることが出来る。こうした成果から乳牛品評会で高位入賞を総嘗めにするようになり，町の品評会で最優秀賞を連続7年間獲得するなど，その後ブリーダー（個体販売重点）から，産乳専門に切り替えた1988年までの20余年間に受けたトロフィーは実に250本にも達し，鈴木家の広い応接間の壁を埋め尽くしている。

1975年には，何もないところから頑張り通し，積極的なアイデアで先進的酪農家へ道を開き，農業の進歩に寄与したとしてNHK日本農業賞の十勝代表に選ばれた。帯広畜産大学西村正一教授の推挙によるものであった。

6．コンピューター酪農の先駆け

着実に進めた施設整備

鈴木がアメリカ研修により樹てた鈴木牧場発展の指針は，「高能率の省力管理の達成と，先端的な効能力牛への資質向上」にあり，これを計画的に構想実現に向けて行動することであった。このため施設整備については長期的展望に立ってビジョンを画き，出来るだけ自家労働力を活用し，段階的投資によってムダなく進められた。例えば現在の3.5ヘクタールに上る建物，施設敷地については，アメリカで見た施設配置を念頭に了め全体像を想定し，自分でレベル（水準器）を使って測量をし，地ならしをして，成牛用のパドック（広場）はすべてコンクリート舗装を施し，また，住宅，車庫，成牛舎で囲まれたヤード部分はアスファルト舗装とし，テニスコート面をその側に設けると共に，訪問者向けの駐車場に使用できるようにする。このように自分の敷地の中に年を逐って順次施設を配置していった。

30年間平均して毎年1棟ぐらい建ててきたことになる牛舎，牧草舎などの各施設はできるだけ金をかけない主義で，当初は部落の離農した農家の住宅を移転して牛舎に改造したり，古電柱や自家カラ松を利用し，暇を見て自分の労力だけで小屋を建てることが多かった。昔父が建てたキング式折屋根の馬小屋は改造して牛舎とし，其の後改造や移転を繰り返し，鉄骨の近代建築群の配置に中に組み込まれ，1998年取り壊すまで50年間にわたって立派に役目を果たし，新旧の調和を見せていた。100年，150年の木造牛舎を大事に使い，それを誇りとしているアメリカ人に学んだものだ。

生産的施設ではない住宅については，いっそうムダな投資を控えるように心掛けており，110坪ある現在の住宅も，父が1947年頃，友人飯島和吉氏の山林から貰った1本の巨木カシワを製材して建てた建物を何回も改造し，建て増しし，外装を整えたもので，過半を自家労力によっている。座敷には家の歴史を記念し，昔の太いカシワの柱が見られる。

サイレージ給餌自動化を考案

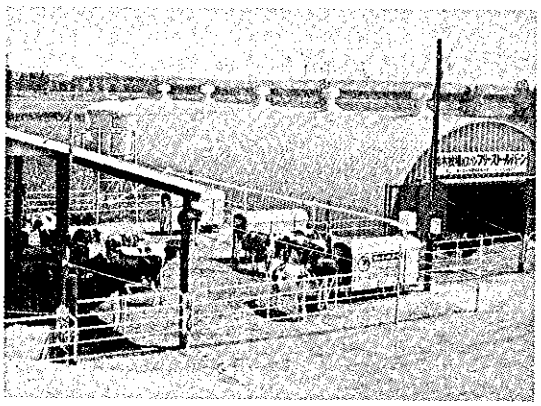
相次ぐ輸入牛の成功で鈴木牧場はたくまし

く成長を続けた。夫婦は必死になって働いたが頭数が40～50頭になると，もう家族労働だけでは手に負えなくなる。1971年にはバルククーラー，パイプライン，バーンクリーナーなどを導入した。スタンチョンによる繋留式の牛舎で給飼するのは大変手間がかかるので，いろいろ考えた末，1975年，500トンの大型サイロを建て，ボタン一つで飼台が左右に移動してサイレージが自動的に供給され，開放的牛舎に飼育された牛が寄って来て自由に採餌する装置を造った。引き続き1978年に同様のサイロを建て，これにはサイロの周囲に回転移動する給飼桶を設け，同じように自動給飼することとした。給飼量は採食量の適性を期するために妊娠牛，搾乳牛などの区分した牛群ごとに採餌時間を設定した上，自由採餌するようになっている。

これらはアメリカで見てきた装置を参考にして独自のアイデアで考案し，かねてから懇意の酪農機器総合メーカー，土谷特殊農機の協力で完成したもので，同時に乾草も給餌場に牛が集合するようにし，給飼の手間が大きく省かれることになった。

初のコンピューター牛群管理

牛が1頭ずつ入れる，蒲鉾型のフィードステーション（給餌室）が広い運動場内に2カ所合計6基置かれており，牛が入っていくと配合飼料が自動的に出てきて，食べ終わり出ていくと後に待っていた牛が交代で入っていく。どの牛も黄色い番号札の着いた首輪をつけている。これが1981年日本で民間初の鈴木牧場へ導入された飼料給餌と個体管理が一体となったコンピューターシステムによる乳牛管理用機の末端装置である。



日本初の乳牛の繁殖管理。
飼料給餌をコンピュータ化，現在は仔牛の哺乳もコンピュータ化（昭和56年）

牛舎が繋留式から開放式（フリーストール）に転換すると多頭数の牛個体の情報把握がだんだん難しくなり，きめ細かい飼養管理の労力と気配りが大変で，見落としも出やすく，何とかより進んだ省力化がないかと模索中であった鈴木に，土谷デームス社から，オランダの最新のコンピューターシステムを導入したから使ってみないかという声がかかった。しかし，商品名でキャトルコードシステムといわれる，コンピューター個別識別装置は，濃厚飼料給与の専門機だったので，鈴木は土谷社長に対し，飼料－繁殖の総合管理ができるシステム開発を要求した。それから1年かかって世界で初めての総合乳牛管理システムが完成したのである。

配合飼料の自動給餌の仕組みは，1頭1頭異なる子牛の乳量データをコンピューターに記憶させ，配合飼料給飼機に連結，それぞれ泌乳ステージに応じたメニューと量の餌を給餌する。繁殖牛の首輪の個体別の番号札の発信器が給飼室に入ると信号によって識別され，その牛にあったメニューの餌が出てくる。1日4回6時間置きに採食して1日の定量に達するとその後餌は出ない。1日の定量を食べ残した牛はコンピューターに記憶され，プリンターに出力されチェックされる。このほか分娩月日，泌乳日数，発情予定日，受精の有無と回数，分娩牛の頭数など飼養管理に必要なデータや指示が出される。帯広畜産大学で，鈴木牧場の実績を分析調査の結果，導入前と導入後の比較で泌乳能力をフルに発揮させ，総産乳量の増加が確認され，基礎牛の改良，淘汰による牛群の資質向上と相まって，1頭

当たり乳量増加を見，飼料の無駄が省かれたことが判明した。コンピューターの本機は牛舎事務室に置かれ，牛舎の給飼機と直結，各牛個体の詳しい情報がインプット蓄積され，毎日のチェックポイントが表示され，いながらにして，きめ細かい個体管理ができる。朝起きて牛舎管理機のボタンを押すだけで自動的にプリンターに全頭の牛の管理ポイントが一目で表示される。外出が多い牧場主がいなくても自動的に適正な給餌，必要な管理が表示され誰にでも安心して任せられる。家族みんなの作業や気持ちに余裕が出て，家族の雰囲気がぐっと楽しいものになった。

7．ゆとりを作る

後ろ絞りで時間短縮

搾乳頭数が増えた鈴木牧場では，スタンチョン方式のパイプラインでは1日2回の搾乳に6時間以上もかかり，とても家族労働でこれ以上の規模拡大は無理，と考えられるようになった。1989年春，鈴木は土谷特殊農機具社長と渡米，各地の牧場を視察，ユニバーサル社が2年前に開発した，後ろ絞りパーラーシステムを見て，導入を決めた。導入したミルキング・ライトアングル・パーラーシステムは一度に20頭搾乳することができる。搾乳する人の位置が牛より低く設定され，①乳房が目の高さで腰をかがめることなくミルカーを装着できるので牛にけられる心配が無く，全くの素人でも作業ができる。②従来の横絞り施設では1頭当たり1.5メートルのスペースがいるのに，僅か75センチメートルですみ，左右2列同時搾乳なので作業者の動線が驚くほど短くて楽になった。③牛の出入りユニットが全頭一斉になったので極めてスムーズで搾乳時間が大幅短縮。④床洗い，ふん尿取りがすべて水洗化され，より衛生的な搾乳環境となった。牛が順々に自ら入ってきて定位置に着くと素早く乳頭を清潔に拭き，牛のまたの間からミルカーを取り付けるだけで，搾乳が終わると自動的にミルカーが外れ，牛は列を作って出ていき，待ちかねた餌にありつく。パイプラインの洗浄は自動化され，殺菌剤と洗剤の行程もすべて自動的に処理される。搾乳時間はそれまでの半分ですみ，2人の労働者で1時間100頭は処理できるようになった。

なお搾乳前に乳房を1頭ごと別々の消毒タオルで拭いていたが，アメリカで見てきた使い捨てのペーパータオルを使うことにし極めて効率的となった。このペーパータオルはアメリカで大量に仕入れて，他の機械類を直輸入するとき，貨物の隙間に詰め，持ってきたので運賃は格安，ペーパー代は1頭当たり年間400円，150頭搾乳として年間総額6万円の支出で，省力と衛生が格段と向上したということで，10年間分を買い置きし積み上げており，ここにも鈴木の合理精神の一端を見ることができる。

ロボット哺乳で省力化

酪農家にとって子牛の哺乳は手間のかかる仕事で，300頭規模の経営ではいつも20～30頭の子牛がいる計算になる。常に先端を行き，システム化によって省力を成し遂げてきた鈴木牧場は，唯一手が抜けなかった子牛哺育の省力化方式を模索し続けていた。ホルスタインの雄子牛を，出産直後に買い取り，常時数千頭も育成している大規模の肉牛センターでは近年自動哺育が行われていることを知り，我が国酪農家では初めて自動哺乳装置を導入した。機械が子牛を育てる，オランダ製ロボット哺乳システムである。鈴木牧場では毎日のように子牛が生まれる。生まれて7～10日間は1頭ずつの小さな小屋に入れて，母親から搾った乳をほ乳瓶で1日2回人間の手によって飲ませる。その後約2カ月間は育成舎の一角に設備された哺乳室（ドリンクステーション）へ自分で入っていき調合したミルクを吸うのである。子牛の首に識別機を取り付けてあり，ステーションに入ると機械が

個体を個別に判断し，コンピューターで哺乳量を設定，自動給餌する。子牛の体調に合わせ，薬などを加えることもでき，哺乳量も一目で判る。導入前は哺乳に1時間は費やしていたが，今は何の労力もかからない。これまで朝夕2回の哺乳が，ロボットの導入で6時間置きの4回哺乳が可能になった。子牛は個体によって哺乳量だけでなく哺育期間に差が出る。それが子牛の成長に合わせた哺乳量の設定で問題が解消した。以前哺乳は玲子夫人が担当し，外出の際は引き継ぎが大変であったが，ロボット化してからは，初生牛以外は無人で作動するため，その必要が無くなった。育成舎に入ると，きれいな敷ワラの上を子牛がゆったりと歩いて2台並んだステーションに向かって入っていき，ピチャピチャと飲み終えると次へ交代する。壁を隔てた裏側の機械室（カーフコード）で見ていると，子牛が入ってくると機械が作動し，その牛に合っただけの乳が調合され，飲む牛の鼻先が見える。調乳は40度の温度で調製され管を通ってのどにはいるときは適温になるとのことである。

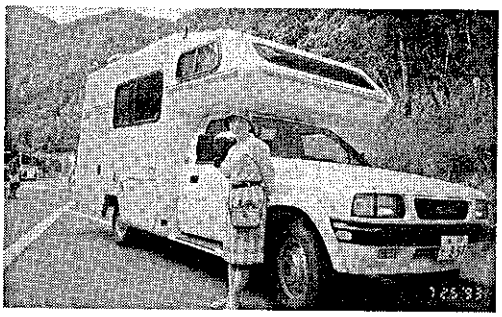
牛飼い夫婦らの喜び

鈴木はこれまで80組余の結婚を取りまとめ，農村花嫁対策で北海道知事賞が贈られている。父辰治氏も，「街の娘さんに酪農家へ嫁さんにこないか。」と声をかけると，「休みがないからいやだ。」との返事が必ず返ってくる，といって苦労していた。1985年から12年間にわたって町酪農振興会長を務めた鈴木は，このままでは深刻な後継者，花嫁不足で酪農家の存続も危ういと奔走，1989年，69戸の酪農家によって士幌町デーリィヘルパーコーポレーションを発足，専任の酪農ヘルパーを置き，農休日を定着させることとした。他の組合でもこうした農休日を設けるようになっていたが，鈴木の場合は他と異なり，それが冠婚葬祭，急用などの穴埋めに止まらず，会員が調整し合って各戸が定期的に農休日を設け，楽しい酪農をするためにその農休日を積極的に利用することにしたのが特徴である。鈴木家も年間20日は利用している。組合員の中には日程が割り当てになっても牛が心配でなかなか休む気にならないものもいたが，「商店なら休めば収入はゼロだが，酪農家は留守の間でもちゃんと牛が稼いでくれるのだから，こんないいことはない。」と説得，積極的に奨め，個々の意識改革も進み定着した。

さらに将来にわたり負担の軽減を図るため，組合各戸と町，農協が3カ年で2億5千万円を拠出し基金をつくった。近年の超低金利により利子収入が激減し，当所目論見から見て負担増の傾向にあり，1998年度の1日ヘルパー1人当たり，牛の頭数の多いもので12,600円程度である。この予定がびっしり詰まっており，鈴木夫婦も5月3日結婚記念日に申し込んだが，予定でふさがり別の日に設定したと笑っていた。ヘルパー制度のおかげで，初めて家族で出かけることができたとの喜びの声がたくさん聞かれた。

ヘルパー人気好調に乗じ，同組合では家族旅行を更に気軽に楽しくできるように1991年末，420万円を投じ，イスズロデオ7人乗りキャンピングカーを購入し1日3,000円で貸し出している。シーズンの7，8月は予約でいっぱいになるなど盛んに使われている。

鈴木酪振会長は1995年酪農各戸の若夫婦の長期旅行に会から10万円ずつ補助するこ



平成元年より年中無休だったヘルパー制度を利用し，全酪農家が利用できるキャンピングカーを購入。

とを提案し，びっくりする者もいたが3年間で全戸を一巡することで実施に移された。酪農家の特色で新婚旅行にも行ったことがなかった夫婦が子供3人をおいて，沖縄，九州を回って来て家庭内の空気が一変したと喜びを報告する話も聞かれた。「両親が休みをゆっくりとり楽しみながらやっているのを見たら，子供たちも酪農のよさを覚えて育つよネ。」

8．明日の酪農を目指して

栄光の宇都宮賞

1995年3月1日札幌パークホテル大ホールでは道内酪農界を代表するそうそうたる名士が参会して，第27回宇都宮賞表彰式が行われた。同賞は，北海道酪農の父といわれる故宇都宮仙太郎翁の事績を顕彰し，永く継承されることを祈念して設けられ，財団法人同翁顕彰会が，毎年，北海道酪農業の模範となり将来の発展に寄与した者を，酪農経営の部，酪農指導の部，乳牛改良の部の3部門に分け，各1名を顕彰するもので，全道酪農家あこがれの最高栄誉である。この年，酪農経営の部に晴れて鈴木洋一が選ばれた。

金屏風の壇上に夫妻で並んだ洋一は感激に紅潮して堂々と謝辞を述べた。鈴木の顕彰事績は若くして渡米実習以後計画的に規模を拡大，現在年間1,030トン産乳の大型経営を実現，コンピューターシステムによる個体管理を日本で初めて導入したほか，フリーストール牛舎，パーラー施設の研究など高生産性と省力化に努め，先駆的役割を果たし，町酪農振興協議会会長など広く貢献していることが認められたもので，鈴木は「評価をいただける経営かどうか自信はありませんが，親から引き継いで丁度30年の節目に名誉ある賞を戴き感謝しています。今後も後継者や女性が夢を持ち，生活を楽しめるような酪農を目指したいと思います。」と語っている。

環境を守る酪農

畜産経営の大型化が進むにつれ，家畜ふん尿処理対策が環境問題として全世界的な課題となってきた。ふん尿による汚染だけでなくそれから発生するメタンガスが地球温暖化をもたらす原因の一つとして注目されてきた。先進的に多頭化を進めてきた鈴木牧場ではいち早く対策に取組み，1997年，D型屋根付き鉄骨堆肥舎600平方メートルを建設した。1日4トン，年間1,400トン排出されるふん尿を堆肥化し牧場に撒布するもので，屋根，コンクリート床，塀で囲まれ，順次圃場に還元撒布しメタン，悪臭の発生が抑えられ，環境問題は一応の解決を見た。堆肥舎建設1,050万円，アメリカ直輸入135馬力の巨大

酪農経営30年の節目に宇都宮賞を受賞。（平成7年）

な専用トラクター700万円，撒布機420万円である。

鈴木牧場の敷ワラは全て畑作農家と契約して小麦カラを使っており，そのほかデントコーンの委託栽培もして，堆肥はこれらの畑へも契約還元して，広い面積の有機栽培に役立っている。

「自動哺育牛舎の完成で，自分の考えるフリーストール（放し飼い）ミルキングパーラーシステムが完成したといえる。ふん尿対策など環境を含めた完全な経営体系が構築できた。しかし目標は常に変わって行くもの，これでいいということはない。」1997年新たに5,500万円を投じて施設整備を行った鈴木は，一定の到達度を確認しながらも，胸中に新たな挑戦を抱いてその夢を描き，語る。都会から滞在体験型来客の受け入れをして消費者との交流を深めるコテージ建設の夢など，その一端である。

鈴木家の手入れの行きとどいた庭園の中央に，柴を背負い働きながら読書する二宮金次郎少年の銅像が建てられている。先代故辰治翁が若い頃から崇敬し，尊徳翁の報徳訓を生活信条として熱心に信奉し，永く家訓とするため建立したものである。洋一，玲子夫妻も早くからその教えを信奉し一家の力強い支えとなっている。勤労と報恩，研さん，前向き，それに報徳訓を貫く合理精神こそ鈴木牧場の歴史を裏付けるものである。

前進する酪農

急速に発達，近代化を遂げてきた酪農であるが，取り巻く環境は極めて厳しいものがある1993年ガット（関税及び貿易に関する協定）・ウルグアイ・ラウンド農業合意により乳製品の輸入自由化が進み，消費者は競って安い外国製品輸入に走り，コストの高い日本酪農はますます苦境に立っている。1998年加工用牛乳政府保証価格（農家の手取り価格）が2年連続引き下げられ1キログラム当り73円86銭となった。（この価格は引き続き下げられ，2000年には72円16銭となっている。）諸物価，賃金が上昇し，生活水準自体も引き上げられている時代に，逆行する生産者価格低落の傾向に対しては酪農家の絶え間ない経営合理化への努力が求められる。都市消費者と生産者が理解と強調を深め，酪農を守り育てて行くことが課題である。30余年にわたる鈴木洋一牧場の進んできた道が，将来の方向のひとつを示していると同時に，新しい世紀に向けさらに前進を続けることを確信したい。

（駐村研究員　研究補助員）

〔附　表〕鈴木牧場経営概況

鈴木家牧場経営概況　　1999年現在

1．住所，代表者　　北海道河東郡士幌町字中士幌基線128，鈴木洋一

2．家族　　母，夫婦，長男　　計4人

3．従業員　　家族3人と実習生1人　　計4人

4．経営面積　　土地面積（所有地）　　37.5ha

耕地（54ha）　　土地利用区分　飼料，デントコーン　　34.0ha

（内デントコーン委託作付　11.0ha）

草地，採草地（内借地　9.0ha）　　20ha

その他（3.5ha）　　建物，施設，敷地

5．乳牛頭数　　320頭 ┌ 哺乳16，　子牛36，　若牛72
└ 乾乳36，　搾乳160

6．経営経過

1936年	S11年	父が現在地で農業開始
1950	S25	牛1頭，豚，鶏購入
1663-64	S38,39	洋一アメリカイリノイ州で酪農実習
1965	S40	父から経営移譲
1967	S42	結婚
1970	S45	畑作物を中止し，酪農専業へ
1975	S50,53	サイロ建設・自動給飼機導入
1981	S56	キャトルコードコンピュータ導入（自動給飼，固体管理総合システム）
1982	S57	フリーストール牛舎新築
1989	H1	ライトアングルパーラー導入
1992-95	H4，7	バンガーサイロ建設
1997	H9	搾乳牛・育成牛フリーストール新設・堆肥舎新設・自動哺乳機導入・乾乳育成舎改造
1998	H10	飼料庫新設

7．乳量の推移

年次	年号	搾乳牛1頭当乳量	出荷乳量	乳牛総頭数	
1965	S40	3,600kg	18.0トン	11	
1970	S45	4,950	79.4	36	
1975	S50	5,400	190.0	72	
1980	S55	5,800	259.0	88	
1985	S60	6,685	398.6	117	
1990	H2	8,005	656.3	184	
1995	H7	8,300	1,154.9	261	
1997	H9	8,987	1,319.0	280	
1998	H10	8,700	1,300.0	305	
1999	H11	8,810	1,370.0	320	(内搾乳牛160)
参考：全道酪農家平均(H9)		8,111	362.0	51	